

# デカルトと日本

—十七・十八世紀フランスに関する  
比較文化史的考察・I—

円 尾 健

—

むかしから、新聞には人物消息欄というものがあるが、それが最近では拡大されてかなりのスペースやウェートを占めるようになってきているのに、人々はすでに気がついていだろう。いわゆる国際化をはじめとして、国の内外における人々の動きや交流が激しくなってきたことを端的に物語っているわけであるが、何年か前に、その一つで、来日したフランスの舞台俳優が、最近のフランスの演劇事情について述べていた中に、こんなことに触れていたことを記憶する。すなわち、最近、フランスでも古典劇をきちんとこなせる俳優が少なくなってきた、と。

これは明らかに十七、十八世紀の演劇を指していっていると思われるが、ただし、これは「昔とくらべて」という程度問題と考えられるのであって、現に、先年、在外研究員としてフランス滞在中にコメディエール・フランセーズでモリエールの『町人貴族』を見た時には、さすがに長い歴史を感じさせる、落ちついて安定したものであった。これは、日本でも、事情は異るとはいえ似たような状況にあるといえるのであって、少し前まで「チャンバラ」、すなわち映画の時代劇などで一世をふうびした俳優たち——坂東妻三郎、大河内伝次郎、通称「アラカン」の嵐寛寿郎、長谷川一夫など——がそろって姿を消した現在、そのあとを継ぐだけの俳優が見当らなくなってきた、あるいはとぼしくなってきたというのと相通ずる現象なのであろう。

たしかに、現代は、「脱工業社会」（いわゆるポスト・インダストリアル）とか、「第二の産業革命」とかいわれるように世界的に激しい文明の転換

期にあるといえるので、生産手段、生活環境の激変にともなって生活感情も変化し、日本でもフランスでも過去は遠のくばかりといった風に見える。だが、一見そう見えるからといって、実際はどうか。ここで、フランスの十七、十八世紀に関連した文章をあげて、それに即してこのささやかな考察を進めてみよう。

私たちはデカルトの世界に生きている。科学的研究の、技術の、私たちの生活に侵入し規定する機械装置の世界に生きている。サイバネティックス、ソシオメトリ、バイオメトリのような新しい学問の世界、コンピューター、ビデオ、人工衛星のような新しい機械の世界に生きている。<sup>1)</sup>  
(傍線筆者)

エリオ・ジャントゥルコ。ヴィーコ『現代における教育研究の方法について』反訳前文(1965)より。

物質的に見ますと、過去一世紀半にわたる人類の進歩は前古未曾有のものであったでしょうが、精神的に見ますと、私たちは一八〇〇年という年からそう遠く隔たっているわけではありません。私たちの宇宙はラプラスの宇宙より遥かに広大ですし、多くの新奇な現象を含んでいます。しかし、私たちの宇宙は少くとも、天文物理学者ならぬ私たちにとって明らかに同じ空間なのです。「……」確かに、私達は、物質的宇宙について、多くの新しいことを発見して来ました。しかし、それは専ら十八世紀末に確立された科学的推論の方法に従った結果なのです。私たちの社会的理想となると、変化はさらに少くなります。私たちは、一人残らず、自由、平等、友愛、民主主義、寛容、人道主義を信じています。少くとも、リップサービスをしないものはいません。現代の各種の「人権宣言」は、アメリカの「独立宣言」や、フランスの「人権宣言」の観念

---

1) 清水幾太郎責任編集『ヴィーコ』(中央公論・『世界の名著』33, 1979)に引用。

に従ったものであります。私たちは、(この点、十八世紀の思想家の大部分と決して衝突しているわけではありませんが)、進歩の不可避性ということについては深い疑惑を持ちながらも、しかし、物心両面の進歩を依然として信じております<sup>2)</sup> (傍線筆者)。

J・H・ブラムフィット／清水幾太郎訳『フランス啓蒙思想入門』より。

以上、二つの短かい、簡単な論評だけでこの過去の二大世紀を片づけることなどとうていできないし、またそのつもりもないが、それでも、少くともそれだけからでも、これらの世紀が現代に対して持つ意味の一端ぐらはいはうかがえるだろう。ところで、十八世紀は一まずさしおいて、本論稿のテーマに沿って、デカルトを中心に上に見てきたような観点から議論を進めることにする。

デカルトは「近代哲学の父」としてあまりにも有名であり、十七世紀だけでなくフランスを代表する、「フランス人の思想生活を左右する力を持っていた、恐らく今も持っている」(ブラムフィット)思想家である。べつに哲学専攻でもない筆者にとって、デカルトとの付き合いはごく通り一ぺんのもので、学生時代に、教室で型通り『方法叙説』を読んだあとは、こんどは教師として授業の必要に応じて最低限の常識を身につけたにすぎなかった。それが、こんどこういう形で取りあげるようになったきっかけは、まず第一に数年前に在外研究員として果たしたフランス再訪であり、ついで帰国後担当した新入生用の授業、通称「プロゼミ」である。

フランス再訪の時のことについては、すでに昨年、『アメリカから見たフランス』<sup>3)</sup> という文章で書いたのでここでは繰り返さないが、「プロゼ

2) 1985, 白水社。第一章「啓蒙思想」より。

3) 『仏語仏文学』第18号(関西大学仏文学会発行, 1989)に掲載。

ミ」では、授業のためにあらためてフランスの古典時代の作品をいくつか読み直しているうちに、昔読んだものも大半忘れてしまっているということに気がただけでなく、多少は知っているつもりでいたこの時代について、実は何にも知らなかったのではないかという反省に迫られたのであった。

個人的な前置きはそれくらいにして、久しぶりに、学生諸君と『方法叙説』を読み、またその他に多少他の文章に目を通して感じたのは、このあまりにも有名な、近代思想の目ざめともいうべき思想的自伝が決してふつうの意味で読みやすいというのでもなく、またわかり易いというのでもないということであった。いわゆる“隔靴搔痒”の感とでもいうのか。

デカルトの文章は、反訳でも分るように、モンテーニュの文章にも通ずるような、バロック的とでもいうか、うねうねと続く文章で、まだ十七世紀の洗練を経験していず、およそ現代的な明快な文章ではない。だが、個々の文章は決して難解をきわめるといえるものではなくむしろ平明といってもよいだろう。だから文字面に即して読んでいくかぎり分りにくいとはいえないにしろ、その背後に流れる思想はそんなに簡単に把握できるものではないように思われる——たとえ、それが三百五十年以上前に書かれたということも考慮に入れても。そんな風にいうと、しよせん門外漢、素人には無理である、あるいは勉強不足であると批判を受けるかも知れない。個人の不勉強、あるいは能力不足との批判は甘受するとしても、それでは他の日本の研究者は、フランス文学やフランス思想の専門家諸氏は、いったいデカルトを十分に読みこなし、理解しているのであろうか。たとえば元京都大学のフランス哲学の専門家、野田又夫先生は、日本でのデカルトについて次のように述べている。

デカルト主義の真理　そこで、こういう大まかな歴史的情勢判断に、現代をも含ませて考えると、われわれの間では、デカルト主義の考え方が一度も思想の主流にあがらなかったといってよい。ただ西洋哲学の理解が学問的に深まれば、当然デカルト哲学の研究は必要となるから、そ

れは明治後期以来いまにいたるまで学者の間でつづけられているのである（傍線筆者）<sup>4)</sup>。

ここで指摘されていることを、ごく端的にいつてしまえば、デカルト主義は、日本では常に思想の傍流として取り扱われて来た、あるいは日本人はデカルトと本格的に取り組んだことは一度もなく、その前をただ素通りしただけということになる。ついでに思い出すのは、筆者がまだ大学院に在学中のころ、関西日仏学館に出入りしていた時に出席していた授業で、担当の哲学の沢瀉先生が、話のついでにふともらされたことばである。フランス哲学の講読か何かで、デカルトに触れて「どうも日本人というのは、デカルトなんかより、パスカルみたいなコロコロしたのが好きで……」といわれたのをはっきりと記憶している。「困ったものだ、だから日本人はダメなのだ」とはいわれなかったが、そう続けられても不思議ではなかったように、個人的には思い出すのである。

両先生とも哲学の専門家であり、とくにフランス哲学には造詣が深く、同時に日本の主要な大学で長年後進の指導にあられた方たちであり、その指摘や発言は、単なる門外漢の思いつきや、気楽で無責任な感想といったものとはおよそ性質を異にする。ともあれ、そこに共通に指摘されているのは、日本でのデカルトの受け入れ方の特異性といったものであろう。要するに、日本人は、デカルトに対して何というか、違和感というか苦手意識とでもいったものを持っている、いずれにしろ、日本人の思考、感性とデカルトの間には一種のみぞがあり、日本人はかれに対して何かなじめないものを感じている、とってよいだろう。

ところで、野田先生の発言にあったように、デカルトが日本で思想の主流にのぼったことが一度もないとすれば、すなわち、西洋近世の偉い哲学者ということになっているから一応儀礼的に付きあったあとは、古本屋に

---

4) 野田又夫責任編集『デカルト』（中央公論・『世界の名著』27, 1978）巻頭解説より。同書68ページ。

持って行く、そうしない分にも、神だなにでもあげてそれでおしまいというのであれば、デカルトは日本では、それでも、いうなれば世界の押しも押されぬ古典中の古典として、別格官幣大社のようなところで悠然として鎮座ましましているかといえば、それどころではない。この、フランスの十七世紀の哲学者は、少くとも日本の一部では、安定した地位を享受するどころか、墓から引きずり出されて袋だたきにあい、小づきまわされているのである。

すでにもう何年も前のこと、公害問題が大きくクローズアップされ、世間の注目を集めだしたころ、今では日本のオピニオン・リーダーの一人と目されている哲学者の梅原猛が、新聞紙上でこの問題を論じた中でデカルトを公害の元兇として糾弾したことがある。ちょうどそのころ、今は亡い三木先生も、同僚の小川君も健在であって、一しょに卒業論文の審査をやった時に筆者がこのことに触れたことをおぼえているし、そのころ、これも今は亡い桑原先生のお宅に用あってうかがった時、この問題について先生の御意見をうかがったことがあるのでよく印象に残っているのである。それだけではない、やはり第二次大戦後のオピニオン・リーダーの一人であり、社会学者として令名の高かった、清水幾太郎にも、デカルトを論じた次のような文章がある。少し長いが引用することにする。

「……」連載は十九回続き、後に『倫理学ノート』（岩波、昭和四十七年）という単行本として出版されたので或いは御承知の方もおられると思うが、ムーア（G. E. Moore）に始まる二十世紀の倫理学の批評から入って行ったのは間違っていなかったが、そのうち新古典派の経済学にたいする不満を述べ、ラッセルや前期のヴィトゲンシュタインの分析哲学に対する一種の憤りを表明しているうち、憤りは数学を一切の学問のモデルにしたデカルトに向けられるようになった。デカルトは一六五〇年に死んでしまったのに、三百年後の私たちは、まだ彼によって支配されている。「……」

『倫理学ノート』を書き綴って行くに従って、私は時々、「デカルト野

郎」と叫びたくなった。本当は、デカルトを祭り上げた連中が悪いのかも知れないが、数学を一切の学問のモデルと見て、あらゆる問題の研究に数学的厳密性を要求するのがどんなにナンセンスなことか、「……」

デカルトおよび彼の追隨者にたいする憤りが烈しくなった頃、残念なことに、何が機縁か忘れてしまったが、ヴィーコガデカルトの最初の最大の敵であるということを知った（傍線筆者）。<sup>5)</sup> 「……」

以上、日本におけるデカルトの運命を簡単にながめてきた。いうまでもなく、アンケートを取ったわけでもなく、また丹念な実地調査を試みたわけでもないのだから、以上が唯一確実な資料だなどという気は毛頭ないが、それでもそこにある傾向は認められるだろう。とりあえずそこに目立つのは、一方において、この哲学者を何かなじめないものとしてひたすら敬して遠ざけるか、それとも、他方において、許しがたい敵として糾弾するか、または憤りを浴びせるといった傾向である。もし野球の試合にたとえたとすれば、デカルトが打席に立つと、ピッチャーはこれを苦手としてまともに勝負しようとせず、ひたすら敬遠の四球で一塁に出そうとし、その一方、観客席の一部からは打者に対して激烈なヤジが聞こえてくる、とでもいえばいいのか……。

ところで、デカルトが「近代哲学の父」（ヘーゲル）であるというのは思想史の常識といってよいのであろうが、野田先生の『デカルト』（岩波新書）によれば、かれの思想には二つの重要な傾向がある。一つは、デカルトがはじめて世界を全体として科学的に見ることをあえてした人であり、もう一つは、そのように世界を客観的に見る主体である「われ」というものをはっきりつかみ、世界において「われ」がいかなる生き方を選ぶかについて、単純かつ徹底した方針を立てたということである。そのように、まさしく近代思想のかなめに位置する人が、日本ではすでに見たように受け取られているというのは、少くとも主流に位置するものとして受け止め

---

5) 清水幾太郎『私のヴィーコ』より。註1)と同所に掲載。

られていないというのは、いったいどういうことを意味するのか。

また、話をフランスだけに限るとしても、この、「フランス人の思想生活を左右する力を持っていた、恐らく今も持っている」思想家が——デカルトの思想そのものは、現在では明かに骨董品と見てよいものであろうが——日本ではただ苦手として敬遠されれば、罵倒されるだけだとすれば、しよせんフランス思想の核心というのは、日本人の思考、感性とはおたがいに水と油のように相いれないのではないか、といった疑問さえ湧いてくるし、中には、早とちりにして、それでは、日本ではデカルトなんかやっただって意味がない、やるだけムダではないかなどといった出す気の早い人も出てきかねないだろう。

このように見てきて痛感するのは、以上のデカルトをめぐる状況において、そこに真に問われているのは個々の問題だけでなく、それを超えて背後にある日本の近代化のあり方そのもの、ひいては日本文化のあり方そのものであるということだ。以上の問題に対して、次にこのような角度から筆者なりのアプローチを試みることにする。

## 二

外国文学・思想研究、一般的にいて外国文化研究に社会的役割ないしは社会的責任というものがあるとすれば——単なる個人的趣味でなければあって当然である——、それはどういうものだろうか。いささか大仰な問題の立て方ではじめるようだが、今の場合でいえばどちらかの肩を持って混乱に油をそそいだり、性急に結論を急いだり、あるいは、見て見ぬふりをしたりするのではなく、問題をできる限り冷静に把握し、全体の中に位置づけてそのありかを示すことだろう。もちろん、それは口でいうほど簡単ではないし、筆者が適任かどうかは別として、専門の研究者としてその試みぐらいはできるし、またやらなくてはならない作業であるとする。

明治以後の日本のように、異質の圧倒的な先進文化と接触し、その吸収に努めた場合、さまざまな精神的混乱や適応異常が、その過程において起こるのは避けがたいことである。具体的には、それは盲従ないしは一辺倒、

その対極に反撥、抵抗、その間に誤解、無理解などをはさむといった形で現れ、明治から平成の現代にいたるまで、日本の近代史はその事例に満ち満ちているのであるが、今のわれわれの場合も思想上のそういった一例と考えられる。

日本でのデカルト批判の代表的な例として、さきに梅原、清水の両説をあげた。いずれも広い意味での近代文明批判というべきものだが、梅原説は『創造の世界』という季刊誌にまとめられ、さらに故湯川秀樹博士をも混じえたシンポジウムでさらに検討されている。こちらの方は、さすがに専門の哲学者だけあって、批判は単なる思いつきというのではなく、しかるべき展望をふまえて進められ、それなりの説得力を持っているが、それはともかく、新聞に出た文にあったように、いきなりデカルトを「公害の親玉」呼ばわりしたりするのはあまりにも乱暴だし、大して意味はないのではないか。

清水説については、先に触れたように戦後の輝けるオピニオン・リーダーの一人であり、筆者はとくに愛読者というのではないにしろ、その時々々の発言には注意を払ってきたし、フランス思想関係では、『オーギュスト・コント』（岩波新書）は、ここ十何年かで最も感銘を受けた本の一つであっただけに、デカルトの批判については、その意図はともかく、その底の浅さに、ただ残念な気がする。この文はひたすらデカルトを批判するのに急で、ヒステリックで感情的な調子が目立ち、論理もあやふやで（例えば、「…本当は、デカルトを祭り上げた連中が悪いのかも知れないが、…」など）、むしろスキの多い文章であって、批判するのはごく簡単であるが、逆にそれだからこそ問題の本質が露呈しているともいえる。そこでそういった事情を承知の上で、あらためて反論を試みて見よう。

一読して明かなように、清水にはデカルトに典型的に見られる、いわゆる近代の数学至上主義的世界観にひたすら憤りを向けているのだが、こういった数学至上主義を批判するのならば、デカルトだけを槍玉にあげてそれですむのだろうか。たとえば同時代のガリレオ、さらにさかのぼってコペルニクス、ケプラーはどうなのか。さらにまた、数学的世界観の源を

たどって行けば、古代ギリシャ哲学、とくにプラトン、ピタゴラスに行き着くが、かれらはいったいどうなるのか。このように考えて来ると、清水は何か大へんな思い違いをしているのではないかという気がしてくるのである。西洋の思想史、ことに近世の思想史をよく知らないか、それとも勝手に読み違えてデカルトに当り散らしているだけだとすれば、あまりにも一人よがりな非生産的ではないか。

もとより、数学至上主義的世界観を批判するのも、デカルト主義を批判するのも自由であり、場合によっては必要でさえあるが、いずれにしる、肯定するにしる、否定するにしる、まず西洋思想史の流れの中に位置づけ、できる限り客観的に捉えるという手続きを経た上のことでなければ、何一つ生産的な議論にはならないのではないか。

そこで、デカルトを捉える基本的なアプローチとして、通時的というか、歴史を縦軸として見て行くと、まず何よりも、デカルトの生きた十六——十七世紀というのは、大きな世界観の変革の時代であったという事実に行き当たる。この変革を科学史の方で「科学革命」(scientific revolution)と呼ぶのはすでに定着したとっていいようだが(このような把握の仕方は、西欧でもそれほど古くから行われていたというわけではなく、それをはっきりと打ち出した、有名な科学史家ハーバード・バターフィールドの『近代科学の起源』(The origins of modern science)がロンドンで出たのは1949年である)、デカルトが思想家として重大な役割を演じたのは、まさしくこの、近代文明の創造にあたって決定的影響を及ぼした革命においてなのであった。

ところで、野田元教授が「デカルトとわれわれ」<sup>6)</sup>という文章の中で、日本とデカルトの関係について指摘しておられるように、ちょうどこの時期に日本は鎖国に入り、その後二百五十年間、この科学革命と無縁で過ごしたという歴史的事情がある。もともと、日本はヨーロッパとは違う文化圏にぞくするが、その異質性は、以上の状況によって決定的となったといっ

---

6) 野田又夫責任編集『デカルト』(中央公論『世界の名著』27)、67ページ。

てよい。いずれにしろ、それだけの長期間、日本人はデカルトその他の科学革命の中心思想に直接接触することはなく、また開国、そして維新以後、明治に入っても、日本人は科学といっても直接役に立つ実用品として取り入れてきたわけであって、現在にいたるまでわれわれは、この「科学革命」、すなわち近代ヨーロッパの精神をじかに知らずに来たのだ。これは、デカルトと日本の関係を考える上でぜひ念頭におかなくてはならない歴史的文脈である。

ところで、その間われわれの知らない間に問題の革命はどういう風に展開して行ったのか。これは大問題であって、とてもこんな小論のわく内で論じられるものではないが、とりあえず T.Bronowski and Bruce Mazlish, *The Western Intellectual Tradition*<sup>7)</sup> や R.T.Forbes and E.T.Dijksterhuis, *A History of Science and Technology 1-Ancient times to the seventeenth century*<sup>8)</sup> の、この点に関する記述にしたがって見て行くことにしよう。

最初の本の著者たちによれば、千五百年から千七百年におよぶ時期に進行したこの革命は、これはまず第一に知的革命(榜点筆者)であって、人々に今までとは違う物の見方を教えるものであった。いいかえれば、そのおかげで、人々の世界に対する考え方は、一変してしまったのである。この革命はその後、十八世紀に実用化されて産業革命となり、それが現代に及んでいるのである。

その際、これらの思想変革者たちがよりどころとしたのが数学であるというのは歴史の常識であり、どこでも触れていることではあるが、そのところを、上記の『科学技術史』によって一べつすると、「十七世紀の初頭、自然科学にたいする数学の重要性は、その実用価値を超えて広く認識されてきた。当時の最大の研究者の中には、数学には、役に立つけれども学問の補助部門にすぎないという以上にはるかに本質的な機能がある、と

---

7) First published by Hutchinson 1960, published in Pelican Books 1963.

8) A Pelican Book, first published 1963.

いうことを悟り出した人がいた」。当時、フィレンツェでプラトンの思想が復活し、さらにピタゴラスの神祕思想に対する関心が芽ばえて、それがコペルニクスを動かし、かれの地動説につながっていったわけだが、かれが自説を訴えた相手も数学者だったということである。

ついで、ケプラーはコペルニクス以上に数学の神祕に心を奪われた人であったようで、かれの神は、「数学の原理に導かれて世界を創造し、そして人間精神が、これらの原理の意味をつかめるようにして下さった」といい、またさらに、「人間が数学をやる時、かれは自然の中に具体的な形を与えられた神の思想に、ふたたび頭の中で接するのである」といったと伝えられる。

ガリレイについても事情は同じでここではその点に関する文章を参考までにあげておくことにしよう。

われわれの眼前にある偉大な書物——というのは宇宙のことだが——には哲学が記されているが、その哲学が記されている言葉や記号をまず習得して把握するのでなければそれは理解できないのである。この書物は数学の言葉で書かれており、その記号とは三角形、円形その他の幾何学の図形であって、それらの助けがなければ、本を一ことも理解することはできず、それらがなければ、人は暗い迷路をあてなく彷徨うするだけなのである（傍線筆者）<sup>9)</sup>。

さて、それでは当のデカルトはどうなのか。かれは、ケプラーほど数学にたいして陶酔的ではなかったけれども、その考えをつきつめて論理的な結論を出して、実質的に科学を数学と同一視した人物ということになるようだ。

以上、科学史を手がかりにして、「科学革命」の底流となった数学について、代表的な数学者、思想家に即してごくささやかな一べつを加えてき

---

9) 註7)と同書153ページに引用。

たけれども、ここで、同時にどうしてもフランスでの展開について一言しておく必要がある。

ルネッサンスは、「これまで世界が知ったもっとも批判精神に欠けた」、  
「もっとも甚だしい、もっとも深い迷信の時代、魔法や妖術にたいする信仰が中世よりはるかにひろく深くひろがった時代」（コワレ）であった。十六世紀末、十七世紀初頭はまず、魔女狩りの狂熱が最高潮に達した時期であり、愚昧な民衆だけでなく、知識人である法官たちまでが悪魔憑きを信じて裁判をおこない、数知れない魔女を焼き殺していたのである。ところが、わずか百年ほどの間に、十七世紀末になると、あれほどはびこった魔女狩りはもうほとんど姿を消し、千六百八十二年の画期的な勅令以後、魔女を病人と認める態度が確立し、魔女裁判はもう存在しないに等しくなっていた。

この目を見はらせる変化は、明かに合理的な考え方の進展であるが、その原因は、少くとももっとも重要なものは、世紀前半の新しい合理的な世界像の創造と、世界をとらえる新しい合理的な方法の確立、すなわち「一六二〇年代の奇蹟」と呼ばれるものである。そしてそれは、他でもない、デカルトをはじめとする一握りのアマチュア科学者たちの知的冒険の成果が、少しずつ各分野にひろがり浸透して物の見方を一変して行く歴史なのである。（以上、赤木昭三『近代合理主義の誕生』、フランス文学講座 5『思想』<sup>10)</sup>による）

ところで、このようにして、はっきりいえることは、近代科学が西欧では数学を中心として展開し、後発国として出発した日本とはまったく違ったあり方をしめしてきたということである。西欧における数学は古代ギリシヤで生まれ、近世に入っては新たな展開をとげて、世界の謎をとく鍵とし、西欧精神の基盤をなしてきた。そこが日本の近代と違うところで、そのことを抜きにして、あるいは考えもせずにデカルトだけを取り上げて、「公害の元兇」呼ばわりして見たり、あるいは「デカルト野郎」とか罵っ

---

10) 昭和52年大修館書店。

てみたところで単なる自己満足どころか、有害無益であり、それこそ公害ということになりはしないか。しかし、一方で外国の思想を正しく理解することのむつかしさをそれは示している。二百五十年の間鎖国をおこなひ、近代の誕生ともいふべき「科学革命」をも直接知らないで過ごしたことが、このような形で現在にも影を落としているともいえるので、少くとも外国文学・思想の研究にたずさわるわれわれにとっても、決して人ごととは思えないのである。

「現在デカルトを読み、デカルトを考えると、いったいどういうことであるべきだろうか」と、アンリ・グイエ『人間デカルト』<sup>11)</sup>の訳者の一人、中村雄二郎は「あとがき」の中で問うている。いうまでもなく、デカルトは「近代哲学の父」として、その哲学は近代原理をもっともよく体現し、故に三世紀も前の近代初頭のものでありながら広く近代の全過程をおおい、その射程は現代にまで、いや、はじめに見たように二十一世紀にまで及ぼうとしている。だが、中村のいうように、「と同時に現代では、近代原理の実現や貫徹が人間の在り様の根本にかかわるところで多くの問題をひき起こし、そのために近代原理やデカルト哲学は、人間とその知の新しい脱皮を阻むものとして問いなおされ、相対化されることが要求されている」のも事実であろう。清水や梅原のデカルト批判もその点にかかわることは確かだが、その批判が建設的であるためには、それなりの手続きというものが必要であり、その手続きを省略して性急に攻撃のやいばを向けてもかえって混乱をまねくだけのように思われる。

紙数も尽きたが、最後にデカルトについてはじめて目をひらかされる思いをした本として、野田又夫『哲学の三つの伝統』<sup>12)</sup>をあげなくてはならない。これは世界思想のパノラマというか、世界史の展開の中で東洋哲学（中国とインド）と西洋哲学を同時に捉えようとした試みで、デカルトのような劃期的な思想はこのようにして本当に理解できるということを痛感

11) 一九八八年白水社。

12) 一九八四年紀伊国屋書店。

させられたという意味で付記しておく。

(本学教授)